

# 紀南教会瓦版

発行元  
紀南教会  
紀南教会瓦版編集委員  
和歌山県田辺市  
下屋敷町80  
TEL/EAX  
0739-25-1191



二〇一三年最初の瓦版をお届けします。今冬は思いも掛けない寒さが厳しい年でしたが梅の花が咲き、空の青さや日差しがスツカリ春です。先日、通りがかりの家の庭に梅の花が咲いていました。そしてメジロ二羽が梅の花をついばんでいました。何だか懐かしい景色のような気がしてホッとしました。まだ寒い日があるでしょう。どうぞご自愛下さい。 編集員一同

## 「わたしを

## 用いてください」

田辺を離れて以後、まずは家族と自分と生活してました。「子どもたちが自分の人生を選んで行く」としている時期、わたしは見守り応援する「そう決めて日々を送っていました。子どもたちに手がからなくなつた分、少しずつ今までの学びをしながら、

控えめにしていた自分のための学びをしながら、そんなわたしのもとに友人からある知らせが来ました。「シユタイナー学校で担任教師を探しています」これは毎年起こることなのですが、その年の知らせは違っていました。あるク

ラスを途中から引き受けてくれる教師を探していたのです。普通は一〜八年まで一人の教師が持ち上がりで担任をします。その教師が担任を続けられなくなつたので後を引き継いでくれる教師を捜しているとの連絡でした。いずれ、担任をしてみたいとは思っていましたが、それは今ではないとその時期のわたしは思っていましたから、新一年生の担任なら応援する気は全くありませんでした。でも、「途中から」という状況が、わたしの心をざわつかせました。その三ヶ月ほど前から自分の進む道を選っていたわたしは日々、「どうか、わたしの進む道を示してください。わたしを用いてください。」と祈り続けてい

ました。そこに舞い込んできたこの知らせ。自分がその役目を果たせる自信などかけらもありませんでしたが、そのクラスの子供達を愛することはできると思いましたし、保護者の皆さんの力になりたいとも思いました。「もし、わたしが役に立つなら、必要とされるなら、そのように選ばれるだろう。他の人が引き受けることならそれでわたしは今進んでいる道を行けばいいのだ。」そう思い、その学校の募集に応募しました。

## 遠い昔の思い出



今から五六年ほど前の遠い話になりませんが、春先になるとよく野原に野草を摘みに行きました。あの頃は畑も沢山あり、川は綺麗でした。一月七日の七草の日には、母、兄弟や近所の方

と春の七草を摘みに行きました。せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、なずな、すずしろ。寒風の中を目を皿のようにして、見つけては歓喜の声を上げ、母に持っていました。しかし、まだ時期が早く成長していないので土にかぶりついている野草を摘むのも大変でしたし、どれほど探しても全種類収穫できない時がありました。そんな時、母は「かま(良いよ)かまん。一生懸命に探しても見つからないんだんやから、神さんは分かってくれる」と言って、五草か六草の七草粥を炊いたのを覚えています。今でも七草粥は大好きで、その時期になると炊きます。今は乾燥七草や、七草セットが売られているので便利です。また時間のある時は、土筆やよもぎを芹、ヨメナなどを摘みに行つて夕食のおかずの足しにしました。私は、野草の匂いが嫌いで、摘みながら「今晚のおかずは土筆か! 臭いのになぁ。嫌いやなぁ」と思ったもので、

よもぎ摘みは嬉しかったです。母がそのよもぎで、よもぎご飯を炊き、おはぎを作ってくれました。時間を掛けて小豆から餡を炊きます。時々には味を見ます。私も一緒に味を見ます。もう少しお砂糖を入れようか。」と言つては少しずつ砂糖を足して甘い餡が出来ていくのが楽しみで、嬉しかったです。そして、「上品な味にするには塩を入れないんや」と母が言ったので、「塩を入れたらどんな味になるん」と聞いたら「シッカリした味になるんや」と教えてくれました。今でも炊き物をする時、その事を思い出します。



## 入院を通じて

## 教えられたこと

紀南教会牧師 上山耕司

私は今回の入院を通して、お医者さんや医療に携わる人々の大切さを強く思わされました。今まで病院にはいい印象はありませんでした。入院して初めて、誠実に患者に向かう担当医、看護師さんを目の当たりにしました。特に若い看護師さんに感動しました。私の病室は四人部屋でした。私以外は、手のかかる患者さんばかりでした。向かいのおじいさんはベッド上で下の世話をしてもらわ

ていました。ある時、水虫の薬を見つけて、おじいさんが遠慮して言わなかった

り難うの言葉も忘れられないです。(すべてカーテン越しで見えないのですが)

若いのにならぬと出来すぎにさえ思えました。このおじいさんは夜中でもブザーを何度もおして、看護師さんを呼びました。今度はきつときつい言葉も出るだろうと期待していましたが、期待はずれでした。別のベッドにお見舞いに来ていた人が、大変な仕事だね、と言った言葉に、「楽しいですよ、良くなつて帰って行かれる姿を見るのが嬉しいです!」これにはまいりました。

又、私はこの病気を通して、今までいかに自分の体を過信していたか、内臓を酷使していたか、言い換えれば、自分の体をいい加減に扱って、大切にしていなかった、ということも思い知らされました。この体は自分の体であつて、自分の体ではない。創造者である神さまのもの、神の宿る神の宮であるのです。「神は御自分のかたちに人を創造した。」無限とも思える宇宙を調

べれば調べるほど、その神秘さ、正確さに驚くばかり、背後に造り主、神さまを覚ええます。それは小宇宙である原子の世界から、小さな虫や植物の葉っぱ一枚に至るまで実に精巧で、不思議な世界です。

二〇〇四年の創刊以来、丸九年三十六号を数えます。毎号上山牧師他二名の方から寄稿いただいていますので本当に多くの皆様の思いや求道の姿をそのひとつひとつに拝見させていただくことができました。改めて感謝申し上げます。その時々思いを打ち明ける場としてこれからも教会瓦版を活用いただきたいと願っています。次号、37号は2013年5月26日発行予定。